

大学の危機をのりこえ、明日を拓くフォーラム

大学フォーラム
つうしん

No.2 2019.4.22

1. 初めてのシンポジウムを開催

大学フォーラムの初めてのシンポジウムが、3月31日(日)の午後、明治大学グローバルホールにおいて開催されました。北は北海道から南は沖縄まで、各地から駆けつけた約200人の参加者で会場は埋まりました。

「大学の危機をのりこえ、明日を拓くために」というテーマを掲げたシンポジウムでは、大学が直面する「危機」の実態に焦点を当てつつ、明日へ向けた課題を広く探ることを主眼に、「基礎科学の持続的発展に向けて」(梶田隆章・東京大学宇宙線研究所所長)、「大学の個性・特性・自主性のゆくえ」(井野瀬久美恵・甲南大学文学部教授)、「地方国立大学の現状と課題」(山本健慈・前和歌山大学学長・国立大学協会専務理事)、「大学は競争すればよくなるのか」(山口裕之・徳島大学総合科学部教授)という4つの報告が行なわれました。

報告のスライドは、大学フォーラムのホームページに掲載してありますので、ご覧ください。

(<http://univforum.sakura.ne.jp/wordpress/>から資料集のページへ)

続いて、「大学とは何か、大学らしさとは何か」という観点から、大学における教育と研究との関係をどう考えるか?という司会者からの問

いかけに始まり、大学教員だけでなく、大学院生・学部学生メディア関係者などを含む参加者からの数多くの質問に対する応答、最後に、「大学と社会との相互理解を進めるためには何が必要か?」という問いを受けた各報告者のまよめめの発言が行なわれました。

会場の参加者からの質問の要旨は以下のとおりです。時間の関係で取り上げることのできなかったものも一部ありますが、それらを含め、大学フォーラムの今後の運営に生かしていきたいと思います。また、参加者の皆さんへのアンケートの一部は、3で紹介します。

* (梶田氏へ) 科研費論文で10%論文の割合が高いのは、流行の研究をやっているからで、ゼロから芽を出すような研究をしていないからではないのか?

* (梶田氏へ) 「科研費はポストクのためにある」と有馬元文科大臣が言っているが、違うと思うがどうか? 申請者には経済的支援はない。博士課程への進学が減少する理由のひとつではないか?

* (梶田氏へ) 日本人ノーベル賞受賞者を、日本では国籍に関係なく日本人としてカウントしている。アメリカの大学の研究者、アメリカ国籍の人は、アメリカ人としてカウントする方が正当ではないか?

* (梶田氏へ) 政府や産業界は、日本が世界以上の経済力を維持することを目的として、イノベーションの拠点として大学を活用しようと大学改革を迫っている。日本は今後、どういう立ち位置をめざすかによって大学の今後のあり方も変わってくると思うが、今後の日本はどんな立ち位置をめざすべきだと考えるか？

* (井野瀬氏へ) 経済学部で30年教員をやって、新入生の社会に対する問題関心、学習意欲の低下を感じている。この現象は、大学(教員)の改革努力によって解決するのだろうか？ 小中学校の子どもたちの自主的な知的好奇心を高める初等教育レベルでの教育改革の努力との連携が、もっと必要なのではないかな？

* 大学の弱体化を考えると、高大連携の悪い影響も考えられると思う。募集のために高校の教育長経験者や教育委員会の経験者を採用して、大学の上層部に据える。研究時間やエネルギーを教員に与えなくてはならないという発想が持てない方が経営陣に入るといったことの問題点もあるように感じている。

* (山本氏へ) 研究力の低下や論文数の減少というデータは、本フォーラムの提言のように近年の大学改革に反対する議論にも、財政審のように大学の競争的改革を進める議論にもつながりうる。そうすると、政策形成過程のどの部分に、誰がかかわる必要があるのか？ 国立大学協会などのアクターがなかなか力を持っていない中で切実な問題ではないかと思う。市民や当事者がかかわるといった話があったが、それは現実的かな？

* (山本氏へ) 財務省の役人は、自分たちの唱えている改革のテーゼが真実であると信じているのか、それとも立場や職を守るために自分たちも必ずしも信じているわけではない改革のテーゼを唱えているのか？

* 大学人が「自発的隷従」を乗り越える論理は何かを教えてほしい。

* (山口氏へ) 大学とは誰が主語となる教育と学習のいとなみなのか？ この場に学生(大学院生)、若手研究者が少ない。その声を代弁または直接に反映するための政策になっていないこと、これまでの大学に関わる大人たち(財務省と官邸ミッション)の無策にどう抗えばよいのか？ たとえば、実務家教員の増員をもたらそうとする最近の方向づけの真の意味や対策はありうるのか？

* 政府(財務省)が大学改革は失敗であると認めて方針を転換するようには思えないが、政府にとっても大学にとってもwin-winとなるような落としどころの案は存在するのかな？

* 産学協同をどう考えるか？

* 持続可能な開発目標(SDGs)のような国連の外圧を活用すること、軍事費と教育費との比較を大学フォーラムとして国民に情報を提示し訴えること、が必要だ。

* 地域社会、自治体単位の研究者がいなくなってしまうのではないかな、地方の劣化、衰退につながるのではないかと危惧する。

* 大学をめぐる状況に大きな問題があることは認識を共有しているつもりだが、その問題を大学自らが拡大・深刻化させている面があることをどう考えるか？ 個々の大学の生き残り戦略が日本のアカデミズム全体の地盤沈下を招いている面があるのではないかな？

* 大学の教育、人事等に問題があること(大学人の無責任)に自覚はあるのか？ 卒業生は大学教育に価値を認めているか？

* 井野瀬氏が指摘した「言語化」、指標化を具体的にどう進めるかについて、各氏の意見を聞きたい。現状批判に代えて具体的提言がないと、力にならない。

* 大学の知見の社会還元、社会との科学コミュニケーションのあり方について聞きたい。

* 改革には若手のエネルギーが不可欠である。参加者には教員の人が多いと思うが、今後、若

い人をどう巻き込むか、そのために何をすべきか？

*市民とどう結びつけるか？ 閉塞感をどうすれば変えられるか？ 文系と理学・工学系では意見が一致しないように感じるが、どうか？

*かつて、私学危機をめぐって大学人集会や署名活動が行なわれたが、いま、全体の動きが見受けられない。今後の方向は？

*例えば授業料の増額を大学の主体的な決定と受け止めてよいのか？ 学生と大学（教員・職員）は協力できないか？

*今国会に提出されている大学等修学支援法案、学教法・国立大学法人法等改正案で提起されている内容は、歴史的文脈のなかでどう位置づけられるのか？

2. 次回のシンポジウムについて

第2回目のシンポジウムを次のように行ないますので、ふるってご参加ください。

■2019年6月16日（日）

13時30分～17時（時間は予定）

■明治大学神田校舎リビティタワー1012教室

■テーマ

「高等教育の機会均等一権利としての無償化」

■報告者

岩重 佳治（弁護士、奨学金問題対策全国会議事務局長）

岩崎詩都香（高等教育無償化プロジェクト（FREE）代表）

中嶋 哲彦（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）

渡部 昭男（神戸大学大学院人間発達環境科学研究科教授）

「大学フォーラム」の「社会へのよびかけ」は、「大学における学びの場を量的にも質的にも確保し、学費負担の軽減によって機会均等を保障する」という課題を提起し、「大学進学率はすで

に十分なほど高くなったというわけではありません。短大を含む大学進学率は57.9%（2018年）に達していますが、地域差が大きく、4年制の進学率では女子の方がかなり低いのも日本の特徴です。充たされていない進学への希望が少なからず残されているのです。社会人の学びなおしの要求もあります」としたうえで、次のように述べています。

「そのさい、学生と家族が重い学費負担を強いられていることを直視しなければなりません。親からの仕送りは減り、アルバイトへの依存度が高まっています。有利子のものを中心とした奨学金受給者の割合が上昇する一方、雇用形態が不安定になる中で、返済に苦しむ人びとも増加しています。大学進学をあきらめた理由のひとつとして挙げられているのが経済的負担の大きさであることに見られるように、学費負担の軽減は、高等教育への機会均等という観点からも喫緊の課題です。」

シンポジウムでは、奨学金の返済に苦しむ人たちの現状や、高等教育の無償化をめざす若い世代の運動について報告を受けたうえで、「高等教育の無償化」を標榜する国の政策について批判的に検討し、国際人権規約（社会権規約）が定めるように、無償化を権利として確立する方途について話し合います。

3. 第1回のシンポジウムで寄せられたご意見から

アンケートにご記入いただいたご意見のいくつかをご紹介します。

このほか、シンポジウムの運営などについてもいろいろなお指摘をいただきました。今後の活動の参考にさせていただきます。

▼研究と教育、国立と私立、行政職と教職員それぞれの視点からの分析・報告がバランスよく

なされていて、1回目としては良かった。

▼政策が大学の皆さんからどのように見えているのか、どのような害を及ぼしているのか、わかりやすく話していただいで勉強になりました。

▼おもしろかったです。それぞれの立場から、知らない（知ることのできない）裏話を聞かせていただいたり、したたかな対応の精神を教えてくださいました。

▼“大学問題”は多様で、個々により立ち位置も違う。その全体像は把握されていないことを改めて感じた。

▼率直な、明快な意見、コメントが多く刺激的な会でした。改革の自己目的化、それを進めようとしている人の意図を認識する必要があると感じました。持っている違和感を言語化することが重要、という指摘に共感しました。

▼日ごろから言いたくてもなかなか言葉にできないもやもやを明確に語っていただいたと思います。ステルスレジスタンスとまでは…ですが、声を上げて行こうと思います。

▼報告、討論ともに内容はとても良かったと思う。建前論ではなく大学をとりまく状況をリアルにそれぞれが報告していたと思う。それぞれの利害関係などを越えて、広がった対話が必要だと思うが、そのようなプロセスをへて、多くの論者が指摘していた「そもそも論」へとつながるのではないかなと思う。

▼学術コミュニティとしての日本学術会議、大学法人のコミュニティとしての国大協に加えて、市民や国公私立横断的にまきこんだコミュニティとして、ぜひ積極的に対話の場として、意見表明をしてほしいです。

▼あまり記事にならないことで細切れの知識しかなかったのですが、今回はっきりと問題が内的に整理できました。ただ、文科省にもぜひ聞いてほしい内容だったので、大学関係者のみの参加だとすれば残念だと思います。今回のテーマは研究費、研究時間、文科省との関係に尽き、

学ぶ側の学生からの視点に欠けていると思います。学生をどう批判精神を持った社会の一員として育てるか、そのためにどんな講義をするか、何を伝えるかを考えなければならないし、それを話し合いたいです。

▼立場、見解の異なる人（財務省関係者、文科省関係者、財界、大学関係者など）が同じ場で議論する場を作ってもらいたいです。幅広いフォーラムになることを期待しています。

▼今回はキックオフなので良いと思うが、もう少し大学政策・科学技術を専門とする研究者の方々を呼んでも良いかとは思っています。

▼私立大学の現状・課題について、個別具体的な話が聴けたら幸いです。政権の押し付ける大学改革は不適切だという見解は全報告者に共通しています。では、どんな改革が現在の大学には真に必要なのでしょうか。今日の講演・討論では明らかではありませんでした。また、そもそも多くの大学教員は“保守的”で改革を嫌います。そういう教員に改革を促すにはどうしたらよいのでしょうか。教員自らが主体的かつ適宜に改革を打ち出さないのが、政権が改革を迫って来ているように思われます。

▼今回のテーマは大学人にとってはわかりやすいですが、一般市民にとっては抽象的にすぎると感じます。今回の特徴は、一般市民が大学についての関心を強くもったことだと思います。大学が市民にとってどういう関心があるか、それに響くような提起（説明）が必要だと思います。また、学問自体が大きく役割が変わってきていることを見るべきではないか。学問が社会の要求に応えきれていないのではないかな。それを前面に出すべきではないかなと思う。

▼大学関係者やアカデミック・コミュニティの内部にいる立場であればよく知られているような事柄であっても、大学に疎遠な、それほど興味をもっていない市民に実情をきちんと伝えること、発信することが、いまさらながらではあ

るが、極めて重要であることを改めて感じました。この内容をどうやって広範な市民に伝えていけるかが、今後ともひきつづき探求すべき課題だと思いました。

▼山本先生の言われる「大学と様々なコミュニティとの関わり」は今後の大学において重要なのではないかと感じました。大学が、特に研究が新聞で報じられているだけの雲の上の存在である限り、市民が大学破壊に気づくことはないと思う。「教育」についての意見・見解が少なかったのが残念でした。

▼これを立ち上げた際のニュースに関する一般市民の書き込みは批判が半分だったので、その観点を变えるのは大変ではと考えました。

▼今後、地方での開催を！ とくに、大学人の「元気」「確信」を強められるようなテーマと報告を！ 運営費交付金の拡大や給付型奨学金の大幅拡大など、具体的政策・要望を学生や市民社会の後押しを集める形で突きつけてほしいです。例えばネット署名など。

▼市民社会との対話（NGO や社会運動、NPO など市民セクターなどの関係者との議論）、少なくとも、アカデミック・コミュニティと市民社会との媒介者を交えたフォーラムを希望します。

▼井野瀬先生がおっしゃっていましたが、私学の「親」へのアプローチはとても面白いと思います。大学への応援部隊を増やして行きたいです。

▼2001年の国立研の独法化が国立大の法人化を促進し、さらに重大な大学の危機のはじまりのきっかけをつくったので、それをきちっと分析・検討する必要がある。そのあたりを議論できる場が必要と思う。

▼今回のシンポジウムで言われた「自発的服従」を回避する方法として、個々人によって異なる手段を講じられるということに関して、「自発的服従」は大学のみならず社会の様々な場面で起こり得ることであり、その手段を我々も周知さ

せる必要性を強く感じた。

▼キーワードは「自己責任」「PDCA サイクル」「自発的隷従」だと思います。これをのりこえる論理を社会全体でつくる必要があります。また「分断」をいかにのりこえるか、重要なテーマだと思います。

▼国際的な観点、SDGs へのかかわりは、とりあげるべき点のひとつかと思います。

▼ちょっと場違いな所にきちゃったのかな。極端なこと言ったら軍国主義（軍事費増大）に反対しないから教育、社会保障が削られちゃうと考えてるので。憲法の財政規律では軍事費はいはずなのに。

▼私は国立研究機関に30年余り所属し、定年後私立女子大に移ったが、研究などが出来る状況ではなかった。大学の種別ごとに考えていくような企画も考えてほしい。

▼教員養成大学、学部問題も、専門職大学問題（研究のない大学）とあわせて取り組んでほしいです。

▼地方大学の役割にふれておられましたが、地方自治体のすべきことについての議論をお願いします。岐阜大・名大合体の問題にたいへん興味をもっています。

▼九州大学大学院出身者の焼死事件について論議してほしいと考えます。優秀な人の使いつぶしの横行はまちがっています。69 通達の検証の必要性を感じます。

▼非常勤講師です。有期雇用によっていつも将来を脅かされています。私たちの問題にも向き合ってくださいればうれしいです。

▼戦後日本の各裁判所には裁判官会議という民主的な組織があり、人事などを決めていましたが、「忙しさ」などを理由にそういった「裁判官自治」を捨てていきました。今の大学の教授会でも同じような事態が起こっていると危惧しています。今回は教員が中心でしたが、職員や学生・院生・非常勤講師の方たちにも登場して頂

きたいと思います。大学に進学しない方々も納得して下さるような主張をつくって行ければよいと思います。

▼大学の自治とはなにかというとき、担い手は誰か。個人的には全構成員自治、つまり全教職員と学生、院生を考えます。

▼若手の教員が会場に少ないと思った。大学での事務に忙しいのか、それゆえ日曜日くらいは研究したいと思ってここに来ないのか、そもそも大学のあり方に関心がないのか。危機感がないと思う。残念。

▼大学側だけじゃなくて、学生も参加しないと大きなうねりにはならない。私立の英文科で出席率は良かったけど、大学の授業カリキュラムをバカにしていたなあ。

▼大変重要な会議でした。しかし、残念だったのは大学の自治・教育の主体としての学生自治会の不存在が問題とならなかったことでした。今後の運動で主題化して下さい。

▼参加者に現役の学生・院生はどのくらいおられたのでしょうか。今後フォーラムとして学生を巻き込む工夫が大切かと思います。

▼若手の発表者を加えられると、若い人の参加もふえるのではないかと。

▼フランクな議論が、政策過程につながる実感もあってよかった。若手が巻き込まれるというより、主になるということ、「若手」のみのパネルを企画してはどうでしょうか。

在住	人数	在住	人数	年代	人数
北海道	1	愛知県	6	40代以下	24
青森県	2	三重県	1	60代以下	42
宮城県	2	奈良県	1	60代以上	58
茨城県	4	石川県	1	記入なし	4
群馬県	1	京都府	3	計	128人
栃木県	1	大阪府	2	出席者 総数推計	201人
埼玉県	13	兵庫県	1	カード 提出率	64%
千葉県	7	香川県	2		
東京都	56	徳島県	2		
神奈川県	14	高知県	1		
静岡県	2	熊本県	1		
岐阜県	3	宮崎県	1		
合計			128		

(注:カード未提出ですが沖縄県からの出席者もありました。)

4. ご協力をお願いいたします

1) ホームページで、大学フォーラムの趣旨に賛同いただける方の署名を募っています (<http://univforum.sakura.ne.jp/wordpress/>)。

社会へのアピール、そして大学の現状に心を痛めている多くの人びとへの励ましになると同時に、身近な場で、同僚同士や教員と職員・学生との話し合いのきっかけになることをも期待しています。

2) これまで、大学フォーラムの運営に約 29 万円を要しています。ホームページの立ち上げなどフォーラムの発足に必要な費用と、報告者の交通費や宣伝費などシンポジウムの開催に必要な費用です。これらの費用は、呼びかけ人による拠出のほか、3月31日に開催したシンポジウムの参加者の皆さんからいただいた募金(103,166円)によって賄っています。

今後とも、行事のさいの募金、随時の募金などの形で、大学フォーラムを財政的にも支えてくださいますよう、お願いいたします。

〔郵便振込〕

加入者名 大学の危機をのりこえ、明日を拓くフォーラム

口座番号 00190-3-451702

00		口座記号・番号はお間違えのないよう記入してください。		金額		千：百：十：万：千：百：十：円	
0	0	1	9	0	3	4	5
加入者名		* 大学の危機をのりこえ、明日を拓くフォーラム		料		金	
通		* 支持募金		金		備考	

〔銀行口座〕

三井住友銀行多摩センター支店 普通預金

口座名

大学の危機をのりこえ、明日を拓くフォーラム

店番号 909

口座番号 1199360